

I. アカデミック ～人類学と坪井正五郎～

坪井正五郎は興味のあることに関して、自分で雑誌をつくる、集まって話をする会を設けるということをごく若いうちから行っていた。校内のことを書き記した自作の回覧雑誌『小悟雑誌』は14歳の時から始め、井上円了らと「夜話会」を行うようになったのは16歳である。その内容が人類学、考古学的なものが中心になっていき、やがて「人類学雑誌」「人類学会」になっていった。

明治16年(1883)9月、坪井は東京大学理学部生物学科に入学。福家梅太郎と最初の論文「目黒土器塚考」を『東洋學藝雑誌』に発表した。

(①『東洋學藝雑誌』19号, 1883)

明治17年、有坂紹蔵、白井光太郎らと東京市本郷弥生町にて土器発見。後に弥生式土器と称される。同じ年、白井ら友人と自発的に人類学会を設立した。

明治19年に人類学会の機関誌『人類學會報告』を発行した。『東京人類學會報告』『東京人類學會雑誌』『人類学雑誌』とタイトルを変えながら、坪井が主に論考を発表した雑誌である。

(②「第二十三會」『東京人類學會報告』第8號, 1886)

明治22年から25年までイギリスに留学、帰国後は帝国大学理科大学教授に就任、明治26年に人類学講座が設けられた。

明治29年には神田孝平の跡を継ぎ、人類学会会長(1896～1913年)となった。

坪井が人類学の研究項目として挙げたのは以下のようなものである(人類学会報告2号)。

人類の解剖・生理・発育・遺伝・変遷、人類と近似動物との比較、人類と絶滅動物の関係、人類と称すべきものの頭われし時と土地、人類住居の変遷、貝塚・土器塚、土器・石器・青銅器・穴居・横穴・塚穴、原始墳墓、文字の歴史、言語の血統、国語の性質、方言・俚歌童謡、家族組織・部落組織、原始美術・宗教・工芸・運輸法・漁撈・商業・農業・衣食住沿革、装飾、風俗習慣、器具沿革、人類の区別・移住・頒布、その他これらに関する事件。

現在の人類学のとらえ方よりも広い、考古学、比較民族学、民俗学を含んだ範囲で、坪井の主な著作の中にも、現在なら考古学、民俗学などに入るものがあり、研究の幅広さがうかがわれる。

(③坪井正五郎著『工商技藝看板考』哲学書院, 1887)

(④坪井正五郎著『はにわ考』東洋社, 1901.7)

(⑤『人類學寫眞集 日本石器時代土偶之部』[東京帝国大学], 1899)

(⑥坪井正五郎講述, 地理歴史會編『人類學講義』國光社, 1905.9)

坪井が『東京人類學會雑誌』『人類学雑誌』への寄稿とともに、熱意をこめて行ったのが人類学の普及や紹介である。坪井の講演の上手さには定評があり、学会だけでなく三越との企画による一般向けの講演会なども数多く行った。

また、人類学や趣味などの幅広い交流を生かして、子ども向け女性向け、趣味の雑誌など、驚くほど多様な雑誌に記事を書いた。

(⑦『ハガキ文学』第2巻4号, 1905)

II. マニアック

～三越「流行会」「児童博覧会」「児童用品研究会」と 坪井正五郎～

1. 三越の時代変化と「流行会」「児童博覧会」「児童用品研究会」

明治 37 年（1904）12 月、三井グループ傘下にあった三井呉服店が分離独立し、株式会社三越呉服店が設立され、初代専務取締役役に日比翁助が就任した。

翌年 1 月、時恰も日露戦争真只中旅順陥落に沸く正月、所謂「デパートメントストア宣言」＝“米國に行はるゝデパートメント、ストアの一部を可致候事”により、日比はアメリカモデルの多目的商空間を目指すことを宣言した。

（①『東京朝日新聞』明治 38 年 1 月 3 日，1905）

日比は次々に革新的な事業を展開、後に「百貨店界の巨人」と呼ばれるようになった。特に藝術・学術文化に力を注ぎ、情報発信・文化装置として、現代の増田通二の「パルコ」の元祖ともいえる、いや、時代背景と文化レベルを考えれば、それを遥かに凌ぐ百貨店を作り上げた。

また明治 38 年 6 月には、PR 誌『時好』の寄稿者を中心に「流行会」を結成した。メンバーには、新渡戸稲造、福地桜痴、佐々木信綱など錚々たる面々の他、児童文学者の巖谷小波の名も挙がっている。

「流行会」は、芸術文化的な広報活動を展開した。三越が、明治 41 年の子供部設置、翌年第 1 回「児童博覧会」開催、同年「児童用品研究会」発足と、児童文化の分野に乗り出したのも、流行会の提言によるものであるといわれている。

2. 坪井正五郎と三越との関わり

坪井は、この「流行会」に明治 42 年 1 月に入会し、早速 2 月の流行会にて「樺太の美術」と題して演述を行っている。

（②『みつこしタイムズ』第 7 卷 3 号，1909）

同年 4 月開催の「児童博覧会」には名流諸大家として審査員に名を連ね、開場式で「子供に関する注意の進歩」と題して演説した他、会期中に「児童博覧会と人種問題」について講演している。

（③『みつこしタイムズ』臨時増刊第 7 卷 8 号，1909）

坪井の玩具好きは、自叙傳に“一人兒なりとて大事にされたと、親戚の女子と同居し居たる爲め其友女子の出入多かりしとに因りてか、余は常に女子と共に『まゝごと』『お隣ごっこ』等の遊びを爲せり。紙を載り、土を煉り、竹を削りて細工物を爲すも余の好む所なりき。細工物の嗜好は今尚脱せず。”とあるように、大人になっても続いており、いよいよ坪井考案の玩具が売り出されるまでになった。そして、その口上は次のようなものであった。

“理學博士坪井正五郎先生の新考案玩具、この他六つ切り五つ切り等珍妙な繪も澤山あります、この四つ切りをまはし廻せは二百五十六種、五つ切りをまはせば千二十四種の奇抜な滑稽は不思議な繪が出来ます 坊ちやんやお嬢さんがたがいろいろマースト、いろいろヘンゲル”

（④『みつこしタイムズ』第 8 卷 11 号，1910）

明治 44 年、「児童用品研究会」は大坂毎日新聞社懸賞募集の玩具遊具審査を依頼され、2 月に巖谷小波、日比翁助はじめ 8 人の会員を派遣、大阪府で行われている「こども博覧会」の視察も兼ねた京阪行きとなった。坪井は京都大学出張を利用してこれに参加したが、弥次喜多も斯くあらんという膝栗毛であったようだ。

（⑤『三越』第 1 卷 2 号，1911）

坪井は、大正 2 年 5 月 26 日訪問先（第 5 回万国学士院連合会出席のため）のペテルブルグで客死、三越との関係も「流行会」・「児童用品研究会」主催の追悼会で終わりとなった。

（⑥『三越』第 3 卷 8 号，1913）

Ⅲ. ネットワーク

～坪井正五郎と集古会をめぐる人々～

「集古会」とは「談笑娯楽の間に考古に関する器物及書画等を蒐集展覽し互に其智識を交換する」（集古会規則第一条）ことを目的として設立された趣味人の集まりである。「人類学会では堅過ぎるから、少しくだけた集をしよう」と坪井が言い出したことから、林若樹、大野雲外、八木柴三郎ら当時の人類学教室の若手を発起人として、明治29年に集古懇話会が開催された。これが「集古会」の始まりである。やがて市中の好事家も会に加えてはということになり、玩具の蒐集家として有名だった清水晴風らが入会した。「流行会」のメンバーだった佐々木信綱・巖谷小波も同じく「集古会」の会員であった。

集古会では、『集古会誌』（のちに『集古』）という会誌を発行していた。ごく初期を除いては和紙・和綴の雑誌で、明治29年から50年にわたって刊行し続けられた。年5回の会合では、事前に出された課題に沿ってそれぞれが物品を持ち寄り、皆で見せ合うということが行われていた。

当時は集古会以外にも、趣味を同じくする者たちが集まって作られた同好会が多く存在した。坪井が顔を出していたものだけでも、「山ノ手談話会」（「山の手月夜会」とも）、「東都掃墓会」、「竹馬会」、「大供会」などがあったが、それぞれの参加者は集古会会員と重なるところが大きい。「大供会」は人形や玩具についての知識交換を目的とする会で、西澤仙湖を中心に坪井・林・清水などが集って結成された。「大供」とは「大きくなりすぎた子供」の謂である。第3回大供会に出席した坪井は、その日話題となったわらべうたを次々と披露した。

（①『集古會誌』庚戌巻五，1911）

清水晴風は集古会の中でも江戸文化、特に玩具に精通し、会合では毎回多数の蒐集品を出品していた。玩具集めに目覚めたきっかけは、明治13年に開かれた「竹馬会」であった。この会は清水の「竹馬の友」竹内久一主催で、一日子供の時分に返って遊ぼうというものであった。予備門生時代の坪井もこの会に出席していたという。清水は、木村徳太郎の勧めで自ら版下を描き、蒐集した玩具の画集『うなみの友』を出版した。『うなみの友』の第五編が出版された明治44年、林・西澤の両氏が発起人となって清水の還暦祝いの会が催され、坪井もこれに出席している。

（②『集古會誌』壬子巻式，1913）

（③清水晴風著『うなみの友』芸艸堂，1891-1924）

集古会に「珍客」として迎えられたフレデリック・スタールは、シカゴ大学の人類学教授で、坪井とは公私ともに関わりの深い人物である。親日家で日本文化への造詣が深く、殊に千社札に熱中し「お札博士」の愛称で知られた。明治42年の来日の際には、坪井の世話で本郷区西片に家を借り、8ヶ月間滞在した。明治43年2月の第4回大供会・3月の第77回集古会に参加し、4月にはこの西片の借家で第5回大供会を開催した。5月の帰国直前には、自著を南葵文庫に持参し、寄贈している。

（④『集古會誌』庚戌巻三，1911）

（⑤selected and ed. by F. Starr, *Japanese proverbs and pictures*, 1910）

南葵文庫は紀州徳川家を継いだ徳川頼倫が、紀州家に残っていた蔵書を基に創始した私立図書館である。南葵文庫は博物館的側面も有しており、種々の展覧会が催されるなど、好古趣味を持つ知識人たちの文化的活動の重要な拠点となっていた。スタールが初めて南葵文庫を訪れたのも、坪井の誘いで伝統玩具の展覧会を見に行った時である。頼倫やその兄の徳川達孝は、好古蒐集家たちのよきパトロンであった。達孝は集古会の正式なメンバーではなかったが、たびたび集古会に出席し、出品もしている。

坪井の多彩な趣味の一つに、当時流行していた狂歌を詠むことがあった。達孝・頼倫兄弟や三越の日比翁輔に、坪井は狂歌を贈っている。これらの狂歌を書き留めた山中共古は、「集古会」や「山ノ手談話会」などで坪井と活動を共にした。牧師として東京・静岡・山梨の教会を歴任しながら、民俗学の先駆的業績を残した。共古は号で、本名は笑。共古自身は、駿河への転居を知らせる葉書に富士山の絵を画いて送ったところ、坪井からお返しに次の狂歌を贈られている。

東海のてんきよしらせんはがきとて かゝれし山はエム型の富士

(⑥広瀬千香著『山中共古ノート』第2集 青燈社, 1973)

坪井が蒐集した名刺が、坪井家から売りに出されていたのを宮武外骨が買い求め、今に残されている。もとは「芳名帖」という題で、名刺が千枚余り貼られていた中から、宮武がおよそ百枚を選び抜き、「名刺集」として一冊に綴じ直した。これら坪井の下に集まってきた名刺の数々を見ても、坪井の交友関係の広さをうかがい知ることができる。

(⑦名刺集 坪井正五郎保存物)

参考文献

- ・『ドルメン』第2巻6、7号 復刻版 国書刊行会, 1975-1976
- ・斎藤忠編『坪井正五郎集』(日本考古学選集 / 斎藤忠 [ほか]編 ; 2-3) 築地書館, 1971-1972
- ・篠田鑛造著『明治百話』(角川選書 ; 24) 角川書店, 1969
- ・末田智樹著『日本百貨店業成立史 : 企業家の革新と経営組織の確立』(Modern business economics ; 41) ミネルヴァ書房, 2010
- ・寺田和夫著『日本の人類学』角川書店, 1981
- ・林直輝, 近松義昭, 中村浩訳著『おもちゃ博士・清水晴風 : 郷土玩具の美を発見した男の生涯』社会評論社, 2010
- ・フレデリック・スタール著『お札行脚』(知の自由人叢書) 国書刊行会, 2007
- ・「三越のあゆみ」編集委員会編『三越のあゆみ』三越本部総務部, 1954
- ・山口昌男著『内田魯庵山脈 : 「失われた日本人」発掘』晶文社, 2001
- ・山口昌男著『「敗者」の精神史』岩波書店, 1995

東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会

(本展示担当委員)

高嶋秀介

木下 直

廣瀬朋美

中村恭子